

聞こえないことと向き合って

水上中学校 二年 中瀬 莉帆奈

私には、遠くに住んでいるおじいちゃんがいます。普段はあまり会うことがありませんが、長期休みの時などに家族で会いに行くことがあります。久しぶりに会うおじいちゃんは、相変わらず優しくてあたたかい人でしたが、最近は耳が遠くなってきたようで、会話がかみ合わないことが多くなってきました。

ある日、夏休みにおじいちゃんの家へ行った時、私は学校であった面白い話をしようとしました。話の途中で、おじいちゃんが、

「ん? なんて?」と何度も聞き返してきて、私はだんだんイラライラしてしまいました。最初は笑いながら話していたのに、三回、四回と同じことを聞かれるうちに、うんざりした気持ちが出来てしまい、「もういいよ、何回も聞かないで」と強く言ってしまいました。その時、おじいちゃんの顔が悲しそうに沈んだのを覚えています。

その後、おじいちゃんはちょっとさびしそうに笑って、「そうか」とだけ言いました。私は「やばい」と思いましたが、素直に謝ることができず、そのまま話題を変えてしまいました。その日は何となくモヤモヤしたまま帰ることになりました。

家に帰ってからも、私はずっとそのことが気になっていました。あの時、おじいちゃんは本当は聞きたかっただけなのに、私は「うまく伝わらない」ことにイラライラして、気持ちをぶつけてしまったのです。話が通じないことが嫌だったのは、実はおじいちゃんではなく、私だったのだと気付きました。

次におじいちゃんに電話をしたとき、私は「この前はごめんね」と伝えました。おじいちゃんは「なんだって?」とまた聞き返してきましたが、今度は私が笑って、ゆっくりと「ごめんね」と言いました。おじいちゃんは「大丈夫だよ」と優しく言ってくれて、少しほっとしました。

それから私は、おじいちゃんと話すときははつきり話すように心がけています。電話では、言葉を区切ったり、大きな声で話したりできるだけ分かりやすく話すようにしています。すると、おじいちゃんも嬉しそうに

「聞こえたよ」と言ってくれるようになりました。私はこの経験を通して、「耳が聞こえにくいくこと」はその人のせいではなく、年を重ねたことで体に変化があらわれた自然なことだと気づきました。私はただ、伝わらないことに対してイラライラしていただけで、おじいちゃんの立場をまったく考えていなかったのだと思います。

人は誰でも、年をとればできなくなることがあります。でも、それを「でき

ない」と決めつけるのではなく、「どうすればできるか」を周りが考えることが大切だと思います。おじいちゃんに話が伝わらないのは、おじいちゃんが悪いのではなく、私が工夫しなかったからだと今は思います。

この出来事を通して、私は「人権」についても考えるようになりました。人権は、誰か特別な人だけにあるのではなく、全ての人が安心して自分らしく生きるためにあるものです。耳が聞こえにくい人も、手足が不自由な人も、どんな人も同じように大切にされるべきです。これから私は、困っている人に出会った時、イライラする前に「何かできることはないか」と考えるようになりたいと思います。私はもう、おじいちゃんに怒ったりしません。これからもおじいちゃんとの時間を大切にして、ゆっくりでも伝え合えるように努力したいと思います。